# 郷土を見つめる道徳遠隔授業の意義

上薗恒太郎*、増田祥子**、米倉典子***、森永謙二***、山本和佳**、藤木卓*

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 奥浦、姫治小学校による道徳遠隔授業
Ⅲ. 総合司会による総括
Ⅳ. 姫治小学校における授業総括
Ⅴ. 奥浦小学校における授業総括
Ⅵ. 刺激語〈インターネット〉による授業評価
Ⅶ. おわりに

## Ⅰ. はじめに

遠隔授業は交流段階をこえて、日常の授業として使う形を考えるときであろう。島を多く抱える長崎では特に遠隔授業が必要である。今回の道徳遠隔授業を進めた動機は、次の点にあった。

１つには、遠隔授業によってどれほどのことができるか、道徳の授業は難しいだろうとの声を耳にした。これは逆に理解すれば、道徳が遠隔授業として成立するならば、多くの授業が可能になるという声である。

２つには、遠隔授業を日常に使うことができれば、小さな学校にとって利点が大きい。少人数のよさを活かすには、もう一方で人間関係と考え方の多様性を広げる遠隔授業が気軽に使える必要がある。日常に使えて、授業として有効な機器設定を構築することが、この授業を計画した２点目であった。

交流ならば異なる学校間が面白いのであろうが、今回、同様な悩みを抱える２校が参加した。日常に使える道徳遠隔授業を目指したためである。海と山の違いはあるが、過疎化に抗して地域の活性化を図りたいとの背景は共通であろう。

授業は、全体で45分の連続する２時間を使い、道徳授業を60分構成とし、授業前30分を顔合わせの時間とした。話し合うためには、授業前に互いを知っておく必要があると判断した。また、機器最終調整の意味もあった。交流の時間30分と道徳授業60分を組み合わせた形である。顔合わせの30分では、自己紹介、遊びによって互いに知り、気持ちをほぐすことを軸に進めた。互いに地域を紹介しあう30分ではなかった。

以下、道徳授業の部分について述べる。

*長崎大学教育学部、**長崎県福江市立奥浦小学校(授業実施時)、***福岡県浮羽町立姫治小学校

## Ⅱ．奥浦、姫治小学校による道徳遠隔授業

### Ⅱ－１．　郷土を見つめる道徳遠隔授業

1999年9月30日午前中最後の時間に、長崎県五島列島福江島奥浦小学校6年生22名と福岡県浮羽郡浮羽町姫治小学校5・6年生 19 名が、郷土愛をテーマに道徳授業をおこなった[1)]。

主　題：見つめよう！わたしたちの郷土
日　時：1999年9月30日（木曜日）　11時から12時
主　催：長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター、長崎県福江市立奥浦小学校、
　　福岡県浮羽郡浮羽町立姫治小学校
学習者：奥浦小学校6年生22名、姫治小学校5年生ならびに6年生計19名
授業者：（総合司会）姫治小学校教頭 森永謙二
　　（授業者）奥浦小学校教諭 増田祥子、姫治小学校教諭 米倉典子
支援者：奥浦小学校 山本和佳、 長崎大学教育学部 技術科教育 藤木卓、
　　長崎大学教育学部 教育哲学･道徳教育 上薗恒太郎

### Ⅱ－２．　道徳遠隔授業の意義

今回の長崎－福岡間遠隔授業の意義は3つ、道徳授業である点、今後のモデルとなる機器構成の点、情報の拡大と格差是正の点にある。

（1）　遠隔授業としては、数少ない道徳授業である。

心の面から子どもたちを支える必要から、1998 年 12 月の新学習指導要領において一段と道徳に力点が置かれた。学校・学級崩壊、いじめといった課題に対処するために、直ちに道徳を期待するのは直線的にすぎるとしても、すぐれた道徳授業への期待は高い。

今日学校教育において、地域、保護者と学校の連携が強調されているが、今回の道徳授業は子どもと学校を心の面から地域に位置づける一環である。この道徳の時間では、子どもたち同士で地域と大人の努力を振り返るのであって、地域の住民を授業に登場させることはない。子どもに自分たちで話し合い、考えてもらおうとした。

考えるという作業を、本授業は、
1）個人で考える、
2）グループで話してみる、
3）書く作業によって考えるという方法をとる、
その他に、
4）考えるための対比対象を設定し、
5）隔たった他者の視点から自分たちの地域を見直すという反省作業
を組み込んだ。

この、対比して新たな視点で考え、離れた視点に立つために、本授業は遠隔という形式を必要とした。

特設された道徳の時間は、視点の獲得、深化に役割があるという立場に立って授業全体が構成された。本時の授業は、感じ、考えるための場にするという趣旨をもった。2画面構成による遠隔という装置も、道徳の価値を子どもたちが感じ、考えるための道具である。

地域に学校を位置づけるという連携は、地域に対する眼を子どもたちがもつことによって、子どもたちの心に成果を産むことができる。地域に根付いた子どもは、心の面からも地域に支えられている構造にある。支えられていることは、崩壊を防ぐ方途でもある。この授業の趣旨は、支えられた構造に向けた子どもたちの視点と心情を深める点にあった。

（2） 今後に使える遠隔授業のモデルをつくる

遠隔という方法は、一つの授業として使われるべき段階にある。遠隔授業が日常となるためには、遠くとの交流だけでめずらしい段階から抜け出して、共通の目標に向かう一体化した授業とならなければならない。そのため本授業では２つの工夫がなされた。

１つは、２画面構成による授業の形を準備したこと、２つには、ティーム・ティーチング体制を組んだことである。

第１に、技術的な課題は、一つの授業として一体化できる近未来的に継続して使える日常的な遠隔授業の形は何か、であった。開発したモデルは、提示画面と一体化画面と名付けた２画面構成であり、２回線２系統（あるいは２回線広帯域１系統）による品質が高くしかも特別な機器を必要としない機器構成であった。

本授業では、画像と音声、教室全体の画像と子どもたちの不規則発言、教師間の連絡ないし発言者間の連絡を、２系統の ISDN 回線で効率よく、また、画像伝送スピードの向上など、より品質の高い通信環境を得ながら構築していくことを目指した。

画面はできるだけ大きいスクリーンを用いた。人物が実物よりも少し小さく写せる画面量が理想である。２画面構成のうち提示画面は子どもたちの前に位置し、授業資料を提示するとともに、授業者が遠隔地にいて子どもたちの前に立つ場合は教師画面となり、子どもたちが互いに対面する場合は対面画面となる。一体化画面は、子どもたちの横いくらか前に位置し、提示画面を向いた状態で隣り合わせに遠隔地の子どもたちを映し出すように設定した。よそ見をすれば隣（の画面）に別の場にいる仲間も並んでいる状態を目指す。そのため、教室内の配置も、およそ半分に子どもたちがおり他の半分に画面がある、画面の左右の位置関係が相手方の教室の子どもたちとこちらとは左右逆に位置するようにした。すなわち、提示画面（黒板方向）から見ると、左に奥浦小学校の子どもたち、右側に姫治小学校の子どもたちが位置する。そしてこの並びは、どちらの教室でも同じである（ように画面を互いに左右逆に配置した）。各教室の天井には傘マイクがつるされ、発言に対する頷きなど賛否表出の声、雰囲気を拾った。場合によっては、提示画面に授業者が立ち、一体化画面が授業資料提示画面として使われることもあった。

こうして本授業は、授業のねらいや指導案だけでなく、技術面でも一体となった授業として構成された。

第２に、授業者を３人、総合司会ならびにそれぞれの教室の授業者を配置した。全体の流れを確保するための総合司会にこの授業では主な発問を割り当て、授業者にそれぞれの子どもの支援をお願いした。授業の流れとして後に示す発問は総合司会のものである。各教室の授業者は、発言しやすいような配慮をしながら授業テンポの調整や、必要な場合の指名、補助質問、マイクを廻す作業などをおこなった。

具体的には、総合司会を姫治小学校の教頭がおこない、各教室の授業者はクラス担任（姫治の場合、５、６年合同クラスのため担任の一人）が担当した。

遠隔授業に馴れてきた場合２人で授業進行できるだろうが、それぞれの教室の子どもたちを知り支援する役割、授業進行を司る役割という３つは、一つの授業として遠隔授業をおこなう基本の形であろう。

（３） 情報の拡大と格差是正

奥浦小学校、姫治小学校ともいわゆる過疎地にあり、情報交流の拡大、情報格差の是正を必要としている。今回の道徳遠隔授業に参加した奥浦小学校の６年生、姫治小学校の５年生と６年生総計で41名という人数は、学ぶ仲間、話す相手を他に求めることにより、情報また思考範囲の拡大を図る必要性を示している。今回使用した機器は長崎大学から持ち込んだものを基本に、各学校所持の機材を加えて構成した。授業終了の後、持ち込んだ機材は撤去したが、空き教室などを利用して日常遠隔授業をおこなえる環境を整えるといい。環境整備によって、遠隔授業をおこなう人材も育つであろう。奥浦、姫治ともそれぞれ特徴をもった地域であり、遠隔授業体制の整備によって広範な情報の中で生活し思考する術を手にする意味は大きい。情報ネットワークに支えられた学校で、子どもたちが自分で地域を確認する目をもち、他にアピールしていくことは、地域の願いでもあろう。

奥浦と姫治は、互いに過疎地として共通の課題を抱えているが、異なった質をもつ地域でもある。奥浦が山がちな地域と外洋を擁しているのに対して、姫治は棚田と彼岸花に彩られる山里の性格をもつ。奥浦が二つの教会をもつキリスト教徒の多い地域であるのに対して、姫治は神社のある町であり、奥浦は行政上福江市に属するとはいえ外に出る感覚で福江中心街を見、都市といえば四十数万の長崎市と海を隔てるのに対して、姫治は福岡市と北九州市といういずれも百万を越える都市とのつながりを村興しに考えうる位置である。教師生活においても、奥浦は福江市に住んで勤務するが、姫治は他の町に住んで通勤可能である。飛行機や船で行く奥浦と、車でいつでも行動できる姫治の違いがある。

互いに同様の課題を抱え、しかし違いのある地域が、同じく郷土愛を考えることは、自分たちの問題を違う背景から考える可能性を示している。それは、都市と田園のような互いにないものを求める遠隔交流とは別に、同質性による共感と異質性による思考の拡大を志向しうる遠隔授業の組み合わせである。

以上のような３点を特色として、この道徳遠隔授業は準備され実施された。

## Ⅱ－３． 主題設定理由と授業評価

本授業の主題は、次のような理由から決定された。

両校とも地域のまとまりは強く、地域興しはそれぞれ大きな関心事であり、子どもたちの郷土に対する思いも強い。こうした思いを意識的に反省する機会として、インターネットによる道徳合同授業を設定した。当日の学習指導案から主題設定理由の一部を引用する。

> 自分をはぐくんでくれた郷土について、他の土地に住んでいる友だちといっしょに考えることによって、外から自分たちの地域を見、郷土を考える視野を広げ、いわばよその土地という鏡に映った姿から、一層深く自分の郷土と自分自身のよさを認識させてみたいと考え、本主題を設定した。

一般に、道徳授業として指導案には、子どもたちのいいところに着目して伸ばしていく理由設定の書き方、教師が子どもを受け入れて伸ばすという姿勢が求められる。

意識的な振り返りを志向する主題設定と関連して、本道徳授業では終末に、子どもたちが下級生に伝えるという視点から授業で得た認識をまとめることにより、自分の住む土地に対する認識を深め、郷土への思いを新たにすることを期待した。

さらに、本授業では授業評価を重視し、授業者の思いが子どもたちにどのように受け止められたか、連想調査を中心に、調査票、感想文、観察の方法を援用した。

評価項目として、次の４つを挙げた。1) 遠隔授業の運営に関して、遠隔機器の構成など、ハード面の検証をおこなう。2)総合司会と２人の授業者という TT の組み合わせについて、うまくいったかどうかを見る。3) 一つの道徳授業を遠隔授業としておこなう場合に用いられる指導案について、研究する。4)子どもたちが郷土を大切にしようとする気持ちに至ったか、主に連想調査を用いて評価する。

概略の結果を述べておくと、２画面構成というハード面は成功したといえる。この点については、別論で述べる[2]。３人での TT は、夏以降の、また前夜の突っ込んだ打ち合わせによって、また授業で用いる発問の流れを作ったことによって、おおむねうまく流れた。指導案については、基本的な流れ、発問の流れなどは作成したが、全体としては完成に至らなかった。連想調査による結果については、郷土を大切にしようとする気持ちに至ったといえる旨など、別論で述べる[3]。

連想調査の刺激語は、それぞれの地域の特徴を示す言葉、〈山〉、〈海〉、また地域ならびに学校を示す言葉を漢字にした場合のなじみがない読みにくさを考慮して〈おくうら〉、〈ひめはる〉と平仮名にし、道徳授業は究極のところ自分に返っていくという認識から〈自分〉、遠隔授業の手段に対する評価項目として〈インターネット〉、の７つを設定した[4]。本論ではこのうち、刺激語〈インターネット〉によって、影響を考察する。

## Ⅱ－４．授業展開概要

【導入：見る、感じる】

（１） 双方の地域の画像（各３枚）を見て、感想を発表、相手のいいところを中心に質疑応答する。

【展開Ⅰ：相手への説明による意識化：自分にとって】

（２） 写真でわからない部分など、自分の考え、感じ方から相手に説明する。
「自分の地域のどんなところを好きですか」

（３） 相手のいいところを、奥浦から姫治の、姫治から奥浦のよさを互いにまとめながら、自分たちが気づかない点に相手が気づいていないか、自分たちがいいと思っていた点を相手もそう思ったか、それぞれの取り組みの違いや共通点を意識化する。

海を目の前にした地域と山にある地域の互いのハード面、ソフト面を紹介・比較し、互いに討議しながら、他の地域の子どもの目に映った地域の姿を介してより客観的に考える作業をおこないたい。奥浦・姫治という、海と山の、一見対照的と思える遠隔２地域をインターネットで結び各々の地域を紹介し合うことにより、自分たちの郷土を見つめ直す。その過程で、地域のよさを再認識すると共に、離れた地域にも過疎化という共通の課題があり、共通に討議できるという認識の地平を確認する。

（4）共通点（人が減っていく、など）を土台に、自分と地域という視点で集約する。

一般的に過疎といわれる共同体の課題を、子どもたちなりの感じ方から考え、今後どうしていくのかまで展開する。伝統を守り受け継いだり、新しいことへ発展させていくなど、地域によって取り組みに工夫が見られることを、話し合いを通して気づかせたい。

【展開Ⅱ：グループ討議と意見交換、グループ中心で、みんなで考える。奥浦、姫治の枠にとらわれない交流を期待する場面】

（5）今後、地域をどうしていけばよいと思うか、どんな取り組みができそうか、少人数でのグループ討議をおこなう。

（6）討議の結果を、各グループ間で意見交換する。

【終末：表現活動を意識することにより、今後につなげる】

（7）自分たちの思いを下級生に伝えるという視点で、奥浦、姫治それぞれポイントを整理し、互いに報告する。

小学校上級生としての自覚から、よりよい郷土にしていこうとする気持ちを高めてもらいたい。高学年としての社会的認識の芽生えを土台に自分たちのとるべき道を考えながら、遠隔授業によって深められた認識によって郷土への思いが新たになることを期待し、ひいては自己のアイデンティティを社会的な側面から深め、その認識を下級生に伝えるという観点からまとめる。この書く作業よって、子どもたちに授業の成果を、確実な気持ちとして定着させたい。

## Ⅱ－5．計画された発問

授業は、互いの地域を示す静止画像を３枚ずつ見せ合うところから始まった。授業展開を示すために、主な発問を記述する。

【導入】

○相手地域の画像を見て、

「どんなところだとおもいましたか」

「質問はありませんか」

【展開Ⅰ】

○「それでは皆さんは自分の地域のどんなところが好きですか」

○「お互いに自分の地域のこんなところが好きだという話が出ましたが、離れたところから見て、相手の地域にはどんなよさがあるともいますか」

○「では、困った問題というのは、お互いの地域にないのでしょうか」

○「人が減ってきているということについて、皆さんはどう思いますか」

【展開Ⅱ】

○「地域の人たちはこれまで、自分たちのふるさとを大切にしようという取り組みをしてきたでしょうか」「グループで話し合ってみて下さい」

グループ討論の結果を発表する

○「私たちはどうすればいいのでしょう」

発表と集約

【終末】

○「自分たちの地域に対する思いを、下級生に対してどのように伝えたらよいでしょう。グループでメッセージを作ってみて下さい」

## Ⅲ．総合司会による総括

### Ⅲ－１　道徳遠隔授業の利点

（１）　新教育課程の提言から

2002年の新教育課程の全面実施にさきがけ、2000年度から道徳教育は全面実施となる。道徳の時間の協力体制については、校長や教頭の参加や他の教師とのティーム・ティーチングによる指導などに積極的に取り組むことを提案している。また、道徳教育の充実には、教材の開発が不可欠であるとし、テレビやビデオなどの映像教材、コンピュータやインターネットなどを活用しての多様な資料の開発などを提案している。今回の遠隔道徳授業は、このような提言を具体的に道徳の時間で取り組むものとして意義があり、子どもとともに、教師にとっても心がおどる取り組みであった。

（２）　小規模校の実態から

小規模校には、人間関係や考え方が固定化してしまったり、話す目的や必然性を感じづらいという課題がある。また、多様な考え方に接する機会が少ないため、学習の広がりが望めないなどの課題がある。

今までも、地域や郷土について学習をする場合、自校とよく似た地域や異なる地域について調べ、自校の地域と対立、対比する学習がおこなわれたきたが、それだけでは学習が深まらなくなっている。

このような小規模校の課題を解決するためには、インターネットなどを活用した遠隔授業が有効である。なぜ「山なのに自然が少なくなっているのか」など、直接身近なことを指摘されたり、自分たちが気づかないでいた地域のよさを相手から称賛されることにより、自分の地域のよさを改めて認識させられることが多い。

（３）　道徳教育のねらいから

今回の道徳遠隔授業の指導内容「郷土愛」を、子どもたちが自分を育ててきた先人（知恵）・自然・人（心）・文化などにふれ、それらを再発見することによって自分を見つめ直し、地域とのつながりにおいて生きている自分を自覚し、自分も知恵・自然・心を継承し文化を発展させる責務があるという心構えをもつことと定義した。

この内容を子どもたちから引き出し、方向づけをおこなうためには、地域のことについて、知ったり、分かることへの働きかけから、地域の中で生きることや生き方への働きかけへとつなぐことが大切だと考えた。

前者の、知ったり、分かるという側面では、外から見る視点の有効性が指摘でき、後者の生きることや生き方への側面においては、多様な意見や指摘を自分で取捨選択しながら、意思決定をおこなっていく必要を指摘できる。

このように、小規模校の道徳教育では、幅広い知見によって、子どもたちの意思決定が

賢明におこなわれるようにすることが大切であり、遠隔授業は小規模校の新しい道徳教育のあり方を示している。

## Ⅲ－２　道徳遠隔授業の留意点

（１）初めてスクリーンや画面を通して対面する相手校の先生や、友だちの前で自分の意見を発表することが苦手な子どもへの配慮が必要である。（子ども表現力の問題）

（２）発表の順番や回数などを事前の打合わせ通り機械的に回すのか、意識の流れによっては、変更するのか判断に迷う場合があった。

（３）総合司会と双方の授業者（担任）との主発問、補助発問などの調整、打合わせを綿密におこなっておく必要がある。

（４）遠隔授業を継続的におこなっていく場合に、器材の設置など専門的な知識をもった人の協力が必要である。

（５）時間割りの変更や時程の調整など、全校での協力体制が不可欠である。

## Ⅲ－３　総合司会として子どもの意識の流れを予測する

本時のねらいは、遠隔地に住む子どもたち同士が郷土愛について考えを深める時間である。そのため、総合司会として郷土愛についての定義から、指導案の流れに沿って子どもの意識の流れを予測する必要があり、板書計画[5]とともに整理してみた。

（１）地域のことについて学習をおこなうので、中心に「地域」を置く。その後、子どもたちの感想は自然や文化のことと予想されるので＜姫治＞＜奥浦＞に分けて考える。

（２）「自然」や「文化」に加え、先人が守り伝えてきた具体的な祭りや行事名について説明するとともに、現在もそれを受け継いでいる人がいることについて、発表することが予想される。ここでは、上下に「人」「先人」を加え、＜姫治＞＜奥浦＞に分けて整理する。

（３）双方のよさについて、４つの視点から発表することが予想されるので、（実際は、人、先人の知恵について難しい面がありそう？）共通点として４つがあることをおさえる。

（４）地域を知ることから、わかることへのはたらきかけとして、過疎という共通の悩みがありながら、地域の人々が離散しないで生活している背景には、どのような価値を感じたり、見つけているからなのかを整理する。

この価値について考えさせる（価値検討によって、地域を見たこと、聞いたことなどを通して、単なる知識として外から地域を見ていたところから、地域の一員としての責務に基づいて、自分を地域に位置付けて考える必要がある旨を整理する）。

（５）地域のことを知る・わかることから、地域とのつながりにおいて、生きることや生き方へのはたらきかけとして、子どもたちの主体的な意志決定（価値判断）を促す必要がある。

そこで、自然や文化を守り生かしながら地域を発展させるためには、郷土を大切にする心や協力・共生することが大切であるとともに、知恵が必要なことを整理する。（地域の人々は豊かさ＜心・自然・知恵・文化＞を求めて生活しており、その豊かさのためには、協力する心や知恵が特に必要であることをおさえたい。）心や知恵が、地域を発展させ、つくっていくと整理したい。

（６）子どもたちなりの地域に対する責務や心構えを整理させる。

## Ⅳ．姫治小学校における授業総括

### Ⅳ－１．姫治小学校紹介

本校区は、東を大分県日田郡、南を八女郡星野村に接する県境の山村で、東西約４㎞にわたって集落が散在している。標高約200mで、夏は涼しく冬は寒さが厳しい。平地に比べて平均３度近くの気温差があり、山間部の集落では冬季の積雪が多く登校不能になる場合もある。

本校では、姫治をふるさとにもつことに誇りをもち、姫治の未来を展望し夢を語り合い、その実現に向けて努力することのできる、豊かな人間性をもった子どもの育成を目指している。そのために、次の３つの力を重視し「地域をパートナー」とした、開かれた学校づくりを推進している。

（１）生命パワー：いきいきと躍動感がもたらす喜びのことである。農業体験、ボランティア、花づくり、ウォーキングなど、様々な体験を通して学校生活を楽しみ、頭だけではなく、体全体で感じる生命力の育成を図っている。

（２）文化パワー：好奇心が生み出す、わくわくする知的な興奮のことである。筑後地区音楽祭やミュージックフェスティバルなどでの、文化体験がもたらす喜びを求めて子どもたちは活動している。

（３）関係パワー：人と共存する実感の中で、わいてでる元気のことである。家族、友情、愛情ネットワークから生まれる温かな力であり、様々な人間関係の中で、子どもたちは生きる力を見出だしている。

また、本校の特色としてパソコンを取り入れた学習をおこなっている。パソコンの活用としては、国語科では、絵本づくりや作文・詩づくりなど、算数科では、グラフづくりや図形づくりなど、社会科では、パンフレットづくりや新聞づくりなど、生活科では、招待状づくりなど、理科では、図鑑づくりなど、音楽では、曲づくりや音づくりなどの活動をおこなっている。

本年度は、新たにインターネットを活用して、長崎県福江市立奥浦小学校との道徳遠隔授業をおこなった。

### Ⅳ－２．小学校を支える地域の様子

本校区は、人口の流入がほとんどなく、過疎化の傾向が続いている。しかし、葛篭地区の棚田が平成 10 年度に、「美しい村景観コンテスト本部長賞」や「ふるさとイベントコンテストの優秀賞」に輝いたこともあり、12 年度には「全国棚田サミット」も開催される。地域住民は、過疎に負けず地域のよさを再発見しようと、９月の「棚田彼岸花めぐり」、10月の特産物販売でにぎわう新川地区の「ばさら祭り」などの地域行事を通して、地域の活性化を図っている。

このような地域行事には、子どもの出番や役割があり、地域全体で次の時代を担う子どもの育成が図られている。また、「ふるさとに生き、ふるさとに育つ子どもの育成」をめざして、姫治の子育てと教育を考える会が組織化されている。役員の構成メンバーは、学校、ＰＴＡ役員、公民館長、区長など 43 名からなっており、ほたる鑑賞会やもちつき大会などの行事を通して、子どもと地域住民の交流が積極的におこなわれている。

さらに、本校区在住の高齢者の方が自分の知恵や技術を子どもたちに伝えたいとの願い

から、「善意銀行」が組織化されている。名前の由来は、農業の知恵・技術・労働力を１年定期として銀行に託し、利息は子どもの豊かな成長や可能性の発揮としている。現在、この主旨に賛同された60名の方が登録され、学校からの要請があればゲスト・ティーチャーとして、花づくりや農業体験の指導をおこなっていただいている。

## Ⅳ－３．子どもたち

全校児童54名の子どもたちは、少人数のため学年を越えてお互いの顔や名前、特徴を知っている。そのため、縦割班で仲良く遊んだり、上級生が下級生の面倒をよく見ながら、進んで児童会活動や縦割班での活動に取り組む姿が見られる。日頃、学校での縦割班活動を生かし、地域に帰ってからも上級生が下級生の面倒をよく見てくれるなど、学年を越えたつながりが、素直で思いやりのある子どもを育んでいる。

しかし、学級編成が変わらないため、友だちに対する固定的な見方や考え方が先行し、一人一人のよさを十分に発揮したり認め合う場や機会が少ないという面もある。保護者や教師の願いも、思いやりの心をさらに高めるとともに、様々な障害を乗り越えていくたくましさを合わせ持った、しなやかな児童の育成を願っている。

そこで、本年度は、１年生から委員会活動に参加させ、低学年のうちから全校児童の前で表現する機会や場を設けている。また、インターネットを活用して、自分たちの地域について調べたことや学習したことを、近隣の学校に情報発信しながら、しなやかな児童の育成を進めてきた。

今回の道徳遠隔授業は、このような取り組みを更に発展させ、単なる情報の収集、発信から、遠隔地の友だち同士が同じ課題を共有しながら、課題解決に向けて活動をおこなったものである。

このことは、小規模校の学年だけの学習では、固定的になりがちな思考から、多面的な思考へと見方・考え方・感じ方を広げることが可能となり、道徳教育を充実・発展させる上で意義深いものと考える。

## Ⅳ－4．道徳遠隔授業のために子どもたちにおこなった支援

地域に対する今までの自分の考え方や、行為を素直に見つめ、これからの生き方について主体的に思いを深めることが可能な授業を創造することが大切と考え、次のような支援をおこなった。

（１） 授業前の支援

① スクリーンを通して、初めて対面する双方の子どもたちの出会いを確かなものにするための、ゲームによる雰囲気づくりでの支援

② 遠隔地にいる子ども同士が、同じ教室で学習しているという雰囲気をつくりだすための、スクリーンなどの器材設置の工夫や椅子の配置を工夫した支援。

（２）授業展開での支援

① 双方の学校の地域のよさを認め合い、地域に対する共通の課題を設定することにより、子どもたち一人ひとりが自ら授業をつくっていくという自覚を高めるための導入の工夫による支援。

② 多様な考え方を実感し、共通の課題を解決していく楽しさや、充実感を体験する

上で必要なじっくり考え、創造する時間を保障する支援。

（３）授業後の支援

① 地域に対する思いを下級生に伝えることにより、学習したことを整理し、地域を大切にする仲間づくりのネットワークを広げていくために、下級生に宛てたメッセージ作成の時間を保障することでの支援。

② 自分たちの地域に対する思いを、広く地域住民にアピールするために「学習発表会」

での、地域の民話劇づくりによる支援。

## Ⅳ－5．不安と期待

テレビ会議ではなく、授業をおこなう。それも前例のない遠隔地との道徳授業とあって、次の様なことが不安となった。

（１）共通のテーマにもとづいた指導案作成や発問づくり

（２）総合司会と、双方の学校の指導者との役割分担

（３）スクリーンを通した話し合い、グループでの話し合いなど共同学習と個人の思考の深まり

（４）ＮＴＴとの打合わせや器材の配置

このような不安材料を抱えていたが、長崎大学教育学部の上薗先生や藤木卓先生、また、関係者の皆様のご指導、ご協力により一歩一歩前進することができた。

道徳遠隔授業の期待としては、次の点があげられる。まず、これからの道徳授業における指導においては、指導体制の充実を図ることが求められており、遠隔授業により、奥浦小の教師と姫治小の教師が協力的指導のよさを取り入れた指導によって、道徳の時間の指導改善や充実を目指すことができる点である。

また、資料開発の面から「郷土資料の開発」「地域素材を生かした資料の開発」などを推進してきたが、資料に道徳的価値が含まれているか、児童の興味、発達に応じたものとなっているかなど、資料作成上の問題が多かった。

しかし、今回の道徳遠隔授業では、長崎大学教育学部の協力により、遠隔地に住む子どもたちが共通の課題をもって授業を進める、新しい発想での教材であるとともに、メディアの急速な進歩に対応できる点からも期待が膨らむものであった。

## Ⅳ－６．授業中の子どもたち

### Ⅳ－６－ａ．授業で気をつけたこと

子どもたちが自ら主体的に授業に参加し、双方の友だちの多様な考えを聞きながら、自他の考えの違いを的確に捉え、考えを修正したり深めながら自分の考えをはっきりもつような授業を創造する上で、次の点に気をつけた。

（１）学ぶ楽しさや充実感を味わわせ、郷土に対する思いを豊かにしていくために、学習を自分たちがつくりあげていくという意識をもたせる、めあて設定。

（２）双方の友だちの考えのよさに気づき、認めることにより、自分の考えを深めることができるような話し合いの仕方や発問づくり。

（３）双方の友だちとのかかわりにおいて、自らの考えのよさや、よさを更に伸ばしてい

くための課題を把握していく上での教師の助言や支援の方法。

Ⅳ－6－ｂ．授業の流れの様子

（1）お互いの地域の画像を見て、相手の地域のいいところを出し合い、それぞれの共通点を意識化する活動

姫治、奥浦の子どもたちが相手の地域のよさや困った問題などを出し合って意見交換したことは、自校内だけの視野の狭い交流と違って、遠隔地の相手校の地域のよさに気づいたり、抱える問題に共通するものを発見して一緒に話し合うなど、視野が広がり、内容的にも深まりのある交流活動となった。

（2） 域の取り組みについてどう考え、今後、地域をどのようにしていけばよさそうかグループで話し合う活動。

自分たちの地域を大切に考えた取り組みや、今後の取り組みについて考えたことは、地域のことを漠然とではなく、具体的に考えていくことで、より真剣に地域を見つめ、地域のことをより身近な課題として自分の中に意識する上で有効であった。

（3）自分たちの思いを下級生に伝えるために、思いを整理しまとめる活動。

自分たちの地域に対する思いを下級生に伝えるために、グループで整理してまとめたことは、奥浦の子どもたちの考えや、自校の友だちの考えを整理しながら、地域に対する自分の考えとしてまとめていく上で有効であった。

また、授業後、地域への思いをさらに伝え広げたいという気持ちから、姫治民話劇づくりに挑戦し、地域への思いを膨らませていった。

Ⅳ－6－ｃ．授業のまとめ

（1）素材の教材化の面から

子どもたちにとって身近な「地域」を取りあげ、地域のよさや問題点を見つめ直し、これからの地域づくりという視点で考えたことは、まさしく子どもにとって心情面を掘り起こす生きた主題であり、新しい道徳授業のあり方を考えることができた。

（2）支援の工夫の面から

①遠隔地との情報交流活動をおこなったことは、他地域の様子を知り、違った視点で自分たちの地域をみつめ直すことにつながり、自分たちの住む地域について深く考える上で意義あることであった。

②授業の流れや子どもの反応、それにともなう支援の仕方などについて、細部にわたり綿密な打合わせを、奥浦小とメールや前日のテレビ会議でおこなったことは、遠隔地に住む子どもたちの授業をスムーズで意義あるものとした。

③長崎大学や奥浦小、姫治小の幾人もの先生方にかかわっていただき、ハード面やソフト両面にわたり、様々な支援をいただいたことで、共通のテーマを設定した遠隔地でのＴＴ授業ができることがわかり、子どもたちにもよい支援ができた。

## Ⅳ－７．道徳遠隔授業を終わっての子どもたち

これまでインターネットを少しずつ活用してきた子どもたちであるが、自分を育んでくれた郷土について、遠隔地に住んでいる友だちと一緒に様々な視点から考えることができ

た。

このことは、郷土を考える視野を広げ、学校以外の幅広い相手から学ぶ姿勢の重要性や、自分自身のよさを認識し、いっそう深く自分の郷土のことについて考えることにつながった。また、これからずっと郷土とかかわっていくであろう自分を見つめ直し、郷土のことについて考える仲間を広げようと、下級生にメッセージを残す姿が見られた。

5年A児の感想　＜えんかく授業をして＞

私は、えんかく授業は初めてで、インターネットを使って長崎の友だちと授業ができるなんてすごいと思いました。おくうらの様子は海があって、姫治と同じで自然にかこまれていました。そして今日は、地域の好きな所、なやみなど、ふだんは気がつかないことを勉強しました。とても最初はどきどきしていたけれども、なれて、意見がいっぱい言えました。インターネットですぐとなりに友だちがいる様子がありました。今度は、もっと外国の人やいろいろな人と授業をしたいと思いました。楽しかったです。

5年B児のメッセージ　＜下級生のみなさんへ＞

みなさんはこの姫治がすきですか？　私たちはこの姫治をきれいにするためにゴミを捨てないようにしようと思っています。下級生のみなさんも、ゴミを捨てないで地域をきれいにしてほしいです。これから、今の姫治がもっときれいになるようにいっしょにがんばってほしいと思います。

今のうちに、もっと姫治のよさを知り、いろいろな行事に取り組み、もっとこの姫治地域をよくしていってください。

## Ⅳ－8. 今回の道徳遠隔授業その後の子どもたち

5年生では、昨年 12 月に実施した「学習発表会」において、保護者や地域住民を前に、姫治民話劇「じょうべらのおきんちゃん」を発表し、地域への思いを伝えた。「じょうべらのおきんちゃん」の劇化を通して、次のような姿が見られた。

（1）子どもたちが、民話に流れる人々の思いや願いを汲み取り、姫治の温かい人情が流れる地域性について話し合い、それを劇のせりふまわしや、動作に工夫して表現しようとする姿がみられた。(進んで表現しようとする力)

（2）昔の様子を祖父母や近所の方に積極的に尋ね、地域やその時代のことをインタービューしてくる姿がみられた。(進んで調べようとする力)

（3）姫治のよさを心と身体で感じ、この地域を心から愛する姿があった。祖父母の暮らしぶり、衣装、道具へのぬくもりを肌で感じる子どもたちの姿があった。

① ぬくもり＝地域愛を意識化

② 進んで地域をアピールしようとする力

（4）地域民話を発表することにより、保護者や地域の方々から称賛され、新たな地域への思いや、地域を愛する人々のネットワークが広がった。

6年生では、地域の方も参加する学習発表会などの学校行事において、地域の人々とのふれ合いを積極的におこなう姿が見られた。

地域においては、「ばさら祭り」を通して、地域のよさを伝えたり、ほたるを守ろうとすることを今まで以上に考えるようになり、卒業製作としてほたるの絵を壁画に残すなど、実践できることから取り組んでいる。

また、子ども会などの行事には、今まで参加賞めあてで参加していたが、地域でのゴミ拾いや溝掃除を、自分からするようになったなど、参加姿勢の見直しにつながっている。

## Ⅳ－9. 教師集団と今回の道徳遠隔授業

道徳遠隔授業を実施するにあたり、本校では校内研修を数回実施した。そこでは、次のようなことが話し合われた。

（1）郷土愛のとらえ方
（2）子どもの課題をもとにした発問の構成のあり方や子どもの発言の取りあげ方
（3）指導案の検討（主題のねらい、子どもの実態、指導過程など）
（4）子どもの思いを生かす教師の支援のあり方（ＴＴ、指導形態など）
（5）授業の評価（指導方法、展開など）

このような全校あげての道徳教育の推進を通して、副読本中心の道徳の時間を見直すとともに、子どもの興味・関心に基づく学習や、自主的・主体的な学習、思考力・判断力などを重視した、問題解決的な道徳の時間のあり方を認識することができた。

## Ⅳ－10. 学校と今回の道徳遠隔授業

本校の教育目標の目ざす子ども像に、豊かな心をもち、いきいきと瞳を輝かせて学び、力強く生きぬく子どもの育成があり、日々の実践に努めている。学校は常に子どもたちの全能力を育てることに向けて、全教師の能力と情熱を集結していくことが大切である。

今回の道徳遠隔授業に取り組んだことを通して、本校職員が道徳教育がどんな意味で大切かを認識して指導にあたるべきかなど、協力体制のあり方を考える上で、意義あるものであった。

また、新教育課程においては、道徳教育への校長、教頭の参加が示されており、今回の授業に教頭が総合司会で参加したことは、道徳教育推進のための多様な指導方法の一つとして、授業の質の向上につながると考える。

## Ⅳ－11. 今回の道徳遠隔授業評価・意見

これまで道徳の時間において、道徳ノートや発言の記録などを工夫し、子どもの意識の変化を確認しようと試みてきた。しかし、どれも評価根拠にあいまいさがあったように思う。

今回の遠隔授業で、連想調査を活用したことにより、一時間の授業の中で、子どもの郷土に対する思考の流れが、どのように変化したかを確認することができた。これは、直接授業に参加していない人にも、変化を知らせることができ、教師の授業に対する評価が明確になる上でも有効である。

しかし、分析・整理については、説明が必要である。

## Ⅳ－12. 今後の課題

（1）道徳遠隔授業を継続的におこなう上での、器材設置の簡素化
（2）相手校と継続的な交流をおこなう上での、年間指導計画への位置づけ
（3）総合的学習の時間で使える道徳遠隔授業の開発
（4） 打合わせの視点の明確化と簡素化

# Ⅴ. 奥浦小学校における授業総括

## Ⅴ－1. 奥浦地区・奥浦小学校紹介

奥浦小学校は福江市の北部に位置する全校児童数92名、職員数12名の小規模校である。奥浦小学校の学校裏には山が、学校敷地内には川が、また川の近くには公園が、目の前には海が開けた自然に恵まれたすばらしい環境の学校でもある。学校敷地内でカワセミやアオバズクを見かけたこともある。その自然環境を生かした体験活動として、サツマイモを栽培したり、公園ができる以前は田植えをして粳米や餅米を栽培したり、魚釣りをしたり、一人一鉢の花を育てる活動が毎年おこなわれている。また、近隣の極小規模校の戸岐小数名の子どもたちと年に数回の交流学習を実施している。

今年は、さらに「五島」という地域性を生かし、収穫したサツマイモから「かんころ」を作り、その「かんころ」をもとに、「かんころ餅作り」にも挑戦した。その活動の陰には、地元ＪＡ職員や老人会の方にサツマイモの植え方を指導して頂いたり、大勢のお父さん方の指導を受けながら「かんころ棚」を作ったり、餅つきには地域の方から道具をお借りするなど、ＰＴＡをはじめ地域をあげての積極的な協力があった。

また、本校では保護者をはじめ、お世話になっている老人会や地域の方々を招待して、伝統行事の一つである奥浦小ミニ・コンサートを毎年実施している。奥浦地区には教会が存在するため本校の子どもたちが活躍している聖歌隊や、毎年奥浦小代表の子どもたちが友情出演している「奥浦混声合唱団」による浦頭教会でのクリスマス・コンサートや各種のコンサートもおこなわれるほど音楽活動に熱心な地域でもある。公民館活動を中心としたスポーツ活動や地区住民を主体とした一般のバレーボールやソフトボールのチームがあるなどスポーツの盛んな地区でもある。そういうことから、平成12・13年度文部省委託の「総合型スポーツクラブ」を奥浦地区公民館で受けることが決まっているほどである。福江市の中の一地区である奥浦地区がスポーツや音楽活動を通してイベントを実施し、他地区の人との交流を図っていることは地区の大きな財産であるとも言える。

しかし、奥浦地区でも過疎化・高齢化が進み、人口は年々減少しており、在校児童は平成８年度は121名いたが、平成11年度には92名と大きく減少している。そのような中で地元を離れている奥浦地区出身者も、いずれ帰郷するなど地元を愛する思いは深いようである。帰郷した人の子どもたちや校区内にある児童福祉施設「慈恵院」に入所する児童以外には基本的には毎年転出入は殆どなく、固定したメンバーで保育園から過ごしてきている。

このような環境で育った子どもたちは、とても純朴でやさしい。また、幼少から互いを知り尽くしているためとても仲が良い。しかし、児童数が少ないうえ校区がとても広く散在しているため、下校後に友だちと一緒に遊ぶことはなかなか難しい。子どもたちの遊びに自然環境を生かしたものは少なく、テレビゲームなどの遊びが多く見られ、そういった

意味では都会との差は少ない。とても恥ずかしがり屋な子どもが多く、積極的に人前に出て活動することはあまり好まなかった。しかし、小規模校という利点を活用し、いろいろな場において子どもたちの活躍の場を与えることによって、子どもたちも積極的になりつつある。

## Ｖ－２．　道徳遠隔授業のために子どもたちにおこなった支援

（１）子どもの実態

本校の子どもたちは、隣接した小学校の子どもたちとの交流学習の一環として、合同で道徳授業をした経験がある。しかし、他地域の子どもたちと同時に違う場所で授業を受けることに対し、初めての経験であり不安と期待は大きかったようである。

（２）支援１

そこで授業に入る前に、まず地図帳で福岡県浮羽郡を探し場所の確認と気づきや感想を発表させた。地図帳で探した後の感想として、次のようなことが挙げられた。

「海がない」「周りが山ばっかりだ」「九州の真ん中にある」などの感想から、子どもたちは無意識のうちにお互いが住んでいる地域の環境の違いに目を向けることができた。山や棚田に囲まれた姫治と海の近くの奥浦の違いを把握することは、住んでいる環境が違ってもふるさとを思う気持ちは変わらないという道徳遠隔授業のねらいである「郷土愛」に迫るために必要だからである。また地図帳で探すことによって、子どもたちは道徳遠隔授業を初めて身近に感じたようで、「どんな学校なのかな」とか「６年生は何人いるのだろう」など期待いっぱいの感想も聞かれ、興味・関心が高まったようすだった。

（３）支援２

次に、姫治小の子どもたちに奥浦を理解してもらうためには、まず自分たちが奥浦のことを知らなければならない。自分たちのふるさとについて十分に認識ができていないとお互いに紹介したり話し合ったりする中で考えを深めることができないからである。

まず、奥浦小の自慢できること、紹介したいことを話し合わせた。予想通り、校内に前田川があること、花がいっぱい咲いていること、自然がいっぱいあること、海があること、生き物が多いこと、教会があることなど、子どもを取り巻く環境に対することなど有形な物がほとんどであった。そこで、奥浦にしかないこと、奥浦にしかできないことなどの行為・心情など無形な部分について話し合わせてみた。夏休みにおこなわれる青少年育成協議会主催の地引き網、奥浦地区混声合唱団ならびに教会でおこなわれるコンサート、ナイター・ペタンク大会などが挙げられた。また、子どもたちの知らない大人の活動として、公民館や青少年育成協議会、町内会などの活動や協力により、観光地ということから道路わきに花を植えたり、前田川にかっぱ公園を作るまでの陳情ならびに植物や川底の整備をしたりという活動を紹介した。中学生以上が参加する球技大会が、地元に残っている人と帰省した人との交流を目的としてお盆に開催されることや、奥浦公民館を活動の拠点とした総合型スポーツクラブの来年度設立に向けた準備が始まったこと、また、福江市から依頼されるほど幅広い年齢層の人がスポーツに親しめる環境であることについても紹介した。子どもたちは自分たちのふるさとである奥浦について、今まで知らなかったことや気づか

なかったこと、自分たちの知らないところで大人である先輩たちが頑張っていることを知るよい機会となったようだ。

## Ｖ－３．　道徳遠隔授業

（１）配慮したこと

現在の転送スピードでは遠隔授業の際、音声より画像が若干遅れる。お互いの声がよく聞き取ることができないと授業が成立しない。そこで、発表をするときの技術面として、マイクの持ち方、声の大きさ、話す速さについて指導した。また、当然普段の学級経営や授業の中でも指導しておかなければならないが、聞くということの大切さを授業者自身も再認識させられた。授業前のふれあいの時間でのお互いの自己紹介をする際に、相手に伝わるような話し方を自分で再度チェックさせた。

また、授業を構成する上で、初めて会う姫治の子どもたちへ奥浦のことを、また、奥浦の子どもたちに姫治のことをただ伝え合い紹介し合うだけ授業にならないよう配慮した。あくまでも道徳の授業であり、予備知識としても大切であるが、それが本来の目的ではないことを常に念頭に置いた。

（２）授業について

まず、それぞれの学校がどんなところにあるのか静止画像による紹介をおこない、感想や相手のいいところを発表しあった。子どもたちは姫治小の風景を見て、初めて見る棚田やあぜ道の彼岸花に対して「きれいだなあ」「奥浦と同じで自然が多い」などというつぶやきが聞かれた。次に、奥浦と姫治の共通する点について話し合った。予想通り、自然が豊かであるなどの良い点だけでなくゴミが多い、人が少ないなどの困った点も挙げられた。

そこで、「地域の人たちはこれまで自分たちのふるさとを大切にするためにどのような取り組みをしてきたでしょう。」という発問に対し、前項のⅢの支援２でも述べたような活動内容が次々と挙げられた。

最後に、自分たちの思いを下級生に伝えるために、自分たちの思いを整理し、まとめたものは次のようなものである。

・みんなが楽しむためのコンサートや地引きあみなどの行事に参加して、楽しさをみんなが知ってたくさんの人に伝えて長く続けていってほしいと思います。

・ゴミを自ら進んで拾ってゴミが１つもないようにしたらいいと思う。雑草をとって花を植え、花いっぱいにしたらいいと思います。だからみんなで地いき全体のために協力していったらいいと思います。

・下級生へ

６年生が卒業したら人数が少なくなってしまいますが、がんばって次のようなことをしてください。

１．日ごろからゴミ拾いをがんばる。

２．いろんな行事に参加する。

３．自主的に奥浦のためになることをする。

４．そうじをがんばったり、花を植えたりする。

以上、この４つのことをがんばってください。

## Ｖ－４．道徳遠隔授業を終わって

### （１）遠隔授業を終えての子どもたち

道徳遠隔授業を終えた子どもたちは、一つのことをやり遂げた充実感でいっぱいの顔をしていた。というのも、普段の授業と大きく違い、通常より１５分長い６０分と時間であったこと、数多くのカメラや参観者がいたことによる緊張や、初めて出会う姫治小の子どもたちから自分たちの知らないことを聞くという活動、それに対応して発表しなければならないという使命感もあり、聞き漏らすまいとどの子も集中していたからである。子どもたちは、「とても楽しかった。」「またやりたい。」という感想を口々に語った。子どもたちの心の中には遠隔授業やふるさとといったことが印象深く残ったようである。また、昼休み時間のしばらくの間、回線がつながれたままだったこともあり、姫治の子どもたちと一緒に話をしたり、遊んだりしていた。この時点では、本校ではまだインターネットがつながっておらず、子どもたちにとって、パソコンやインターネットが身近に感じられた授業でもあった。

### （２） 学校と今回の道徳遠隔授業

平成 10・11 年度に福江市教育委員会の委託を受けて本校では道徳教育の研究を進めた。また、本校での道徳遠隔授業は一昨年に続き今回が２度目であり、本当に貴重な体験をさせていただている。したがって、本校職員も道徳遠隔授業がどういうものなのか理解できている上、本校でもパソコンが導入され、インターネットもまもなくつながるという時期でもあり、当日は60分の授業を交代で各学年の子どもたちにも担任教諭引率のもと授業参観をした。授業者も前回の遠隔授業では準備のお手伝いをしたり、授業時はビデオ撮影係として関わっていたため、抵抗なく取り組むことができた。本校では道徳研究の指導法の一つとしてとらえており、本校職員の関心も高かった。２回目ということもあり、参観した子どもたちも「来年は、ぼくたちかな。」という淡い期待を持っている。

### （３）今後の課題

いつも同じ場所で、同じメンバーと、同じように学習してきた子どもたちにとって、違う場所にいる友だちと同じ時刻に同じ学習をするという、現在の日常生活ではほとんどあり得ない授業を体験し、いい刺激となった。こういう学習は離島などの過疎地の子どもたちにとって意義深い授業だということを改めて強く感じた。そんな中で資料提示が今後の課題として挙げられる。

インターネットならではの授業として、同時に子どもたちの意見交換ができたことは意義深かった。その反面、導入の場面で静止画像を紹介した点は写真と変わらず、インターネットでしかできない動画による紹介があってもよい。今回、学校近辺にあるそれぞれの地域を象徴する史跡、風景の静止画像を資料として提示した。しかし、その静止画像を見て、それぞれの学校がどんなところにあるのか紹介するに留まり、道徳遠隔授業のねらいである「郷土愛」に迫りうる資料提示だったかというと疑念が残る。「郷土愛」に関わる提示資料のなかに、目には見えないもの、例えば、ふるさとのためにがんばっている人たちの活動などの動画資料があるともっとねらいに迫ることができたのではないか。

## Ⅵ. 刺激語〈インターネット〉による授業評価

今回の道徳遠隔授業が子どもたちにどのように受け止められたのか、連想調査の刺激語〈インターネット〉の結果をみる。

表１ 奥浦・姫治、刺激語〈インターネット〉による授業後の連想調査結果

| 奥浦・姫治連想調査 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ｲﾝﾀｰﾈｯﾄpost | 反応者総数 | 40 (−1) | | |
| | 語種数 | 70 (+4) | | |
| | 反応語総数 | 142 (+6) | | |
| | ｴﾝﾄﾛﾋﾟ | 5.59 (+0.21) | | |
| Responsed Words | 反応者数（人） | 人数比 | 反応差実人数 | 反応差人数比 |
| パソコン | 16 | 40.0% | −5 | −12.5% |
| 楽しい | 10 | 25.0% | 1 | 2.5% |
| コンピュータ | 6 | 15.0% | −2 | −5% |
| すごい | 5 | 12.5% | 2 | 5.0% |
| 機械 | 5 | 12.5% | 0 | 0.0% |
| 友達 | 5 | 12.5% | 2 | 5.0% |
| 情報 | 5 | 12.5% | −1 | −2.5% |
| 通信 | 4 | 10.0% | 2 | 5.0% |
| 世界 | 4 | 10.0% | −1 | −2.5% |
| メール | 4 | 10.0% | 0 | 0.0% |
| スクリーン | 3 | 7.5% | 2 | 5.0% |
| 便利 | 3 | 7.5% | 0 | 0.0% |
| 調べる | 3 | 7.5% | 2 | 5.0% |
| 遠い | 2 | 5.0% | 2 | 5.0% |
| 遠くの人 | 2 | 5.0% | 1 | 2.5% |
| 画面 | 2 | 5.0% | 0 | 0.0% |
| 姫治 | 2 | 5.0% | 0 | 0.0% |
| 話 | 2 | 5.0% | 1 | 2.5% |
| キーボード | 2 | 5.0% | 1 | 2.5% |
| ゲーム | 2 | 5.0% | 1 | 2.5% |
| ホームページ | 2 | 5.0% | 0 | 0.0% |
| 会話 | 2 | 5.0% | 1 | 2.5% |
| 難しい | 2 | 5.0% | 0 | 0.0% |
| 触れ合う | 2 | 5.0% | 2 | 5.0% |
| 勉強 | 2 | 5.0% | 2 | 5.0% |

＊網掛けは授業後に減少した言葉。

( )内は授業後の増減。以後本文中でも（ ）に授業後の増減を示す。

〈インターネット〉の調査結果を奥浦、姫治いっしょに集計すると（表１）、授業前合計29人が「パソコン」や「コンピュータ」と答えていたものが、７人減って22人になっている。授業前、インターネットは、内容よりも媒介する機器を連想させるものであった。

２人以上増えた反応語を見ると、「すごい」「友だち」「ふれあう」「遠い」「通信」「勉強」「調べる」である。反応語総数が６語増えていることからすると、これらの増減がもった影響が大きかったことがわかる。増加した言葉は、感嘆、友だちとの触れ合い、遠隔による勉強、と意味を読みとることができる。遠くの友だちとの触れ合いの中で授業を展開するのだという授業者側の意図が、子どもたちに通じたと見ることのできる結果である。そして授業として使った〈インターネット〉を「すごい」と感じてもらえたのであれば嬉しい。エントロピ（+0. 21)、反応語種数（＋４)、反応語総数（＋６）ともに増加しているところから、授業を通じて、インターネットに対応する言葉は増加し多様になっている。

「楽しい」という反応語が授業後〈インターネット〉による反応語の第２位にあり、４分の１の子どもが答えている。全体では、１語増加に止まるが、奥浦では２語の増加になっている。奥浦では、授業前に「欲しい」「やってみたい」という姿勢が見られたが、授業後は「すごい」が３語増えた、満足したのであろう、３位であった「楽しい」が連想語の１位になっている。２語増えたのは他に「スクリーン」「遠い」であり、大きなスクリーン２枚を使っておこなった遠隔授業を楽しみ、感激したようすが伺える。

姫治では、語数の増減はないものの「メール」が授業前、授業後で３位、２位と高い。メール機能を知っているようすが伺える。姫治で２語増加したのは「調べる」「触れ合う」「勉強」で、この道徳遠隔授業で〈インターネット〉による勉強の面を意識したことがわかる。

二つの学校の違いは、校風の違いであろうか。刺激語〈インターネット〉について奥浦、姫治それぞれのエントロピの増加を見ると、奥浦（+0.21）は姫治（+0.16）より動きが大きい。姫治の子どもたちはいくらか硬くなっていたのかも知れない。

カテゴリに分けた反応語を授業前後で比較すると（図１、図２)、《情報》を連想する子どもの数にほとんど変化はないが（人数比で+0.4%、総反応語数比で−2.2%)、《パソコン》類の機器を思い起こす者は減っている（人数比で−4.8%、総反応語数比で−3.5%)。

《やりたい》という気持ちは授業前に見られるが、授業後は消失している。人数比で−14.6%、反応語総数比で−4.4%の減少ということになる。消失したのは、授業で使ったことで満足したからだろうか。

増加は３つのカテゴリ、《友だち》（人数比で＋16.3%、総反応語数比で+3.5%）《楽しい》（人数比で＋10.9%、総反応語数比で+2.4%）《勉強》（人数比で＋15.1%、総反応語数比で+4.2%）である。

エントロピをみると、+0.2増加しており、反応語種数（４語増加)、反応語総数（６語増加）ともに増加している。《やりたい》の消失とあわせて考えると、《友だち》《楽しい》《勉強》の増加がもつ意味が大きいと判断できる。

この授業によって、いままで知らなかった地域のみんなと知り合いになる意味があった、また遠隔授業機器が勉強に使えるという認識がひろがったといえる。授業後に17.5%が〈インターネット〉から《勉強》に関わる言葉を思い起こす点から、遠隔という形で授業を成立させようとした意図は、子どもたちにも伝わったとみていい。

《楽しい》はカテゴリとしては必ずしも肯定的な感情のみを包摂するカテゴリではなく、「難しい」が２語含まれるが、授業の前後ともに２語のままで動かない。道徳遠隔授業が、子どもたちに「すごい」「楽しい」と受け止められた傾向は、カテゴリ分類でも現れる。

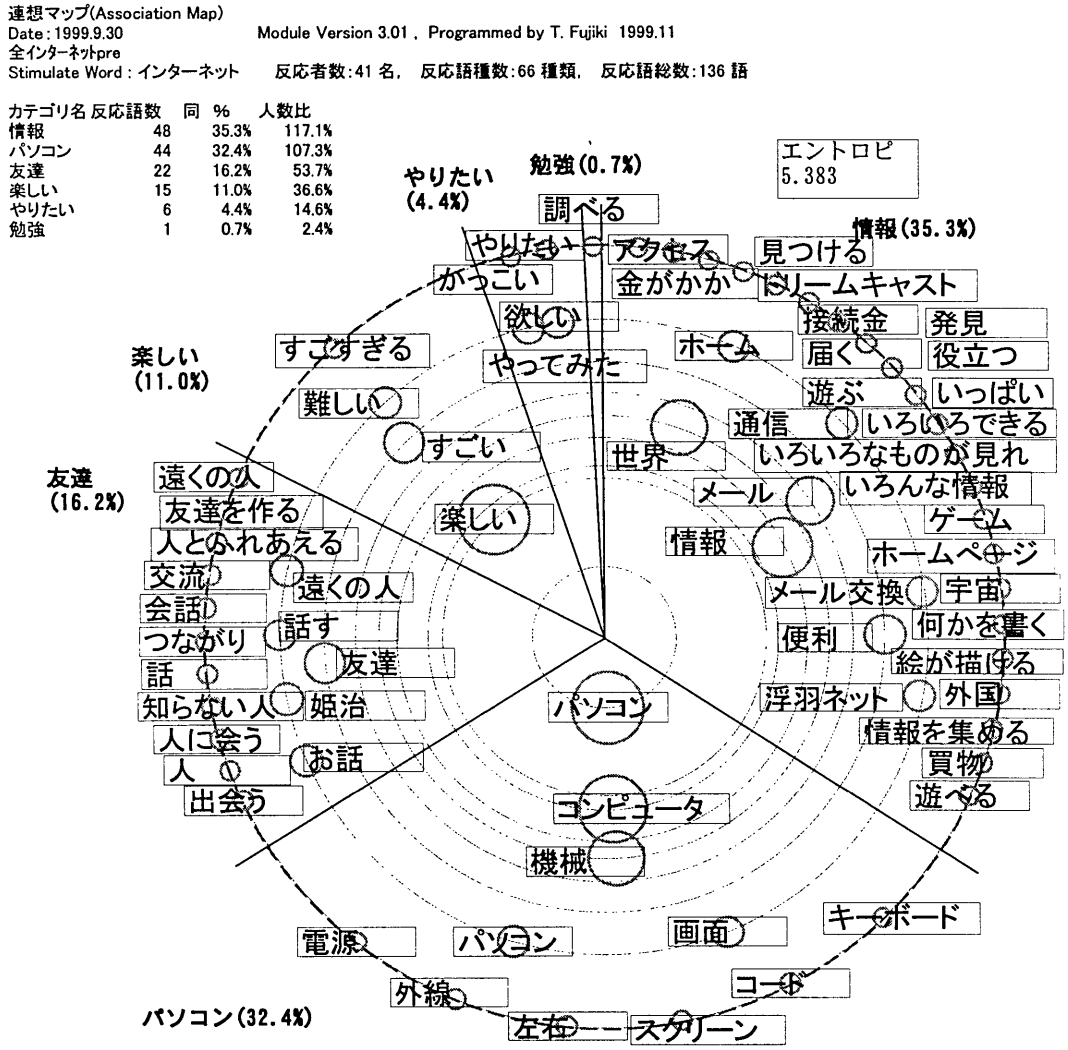



図１　奥浦・姫治、授業前〈インターネット〉連想カテゴリマップ

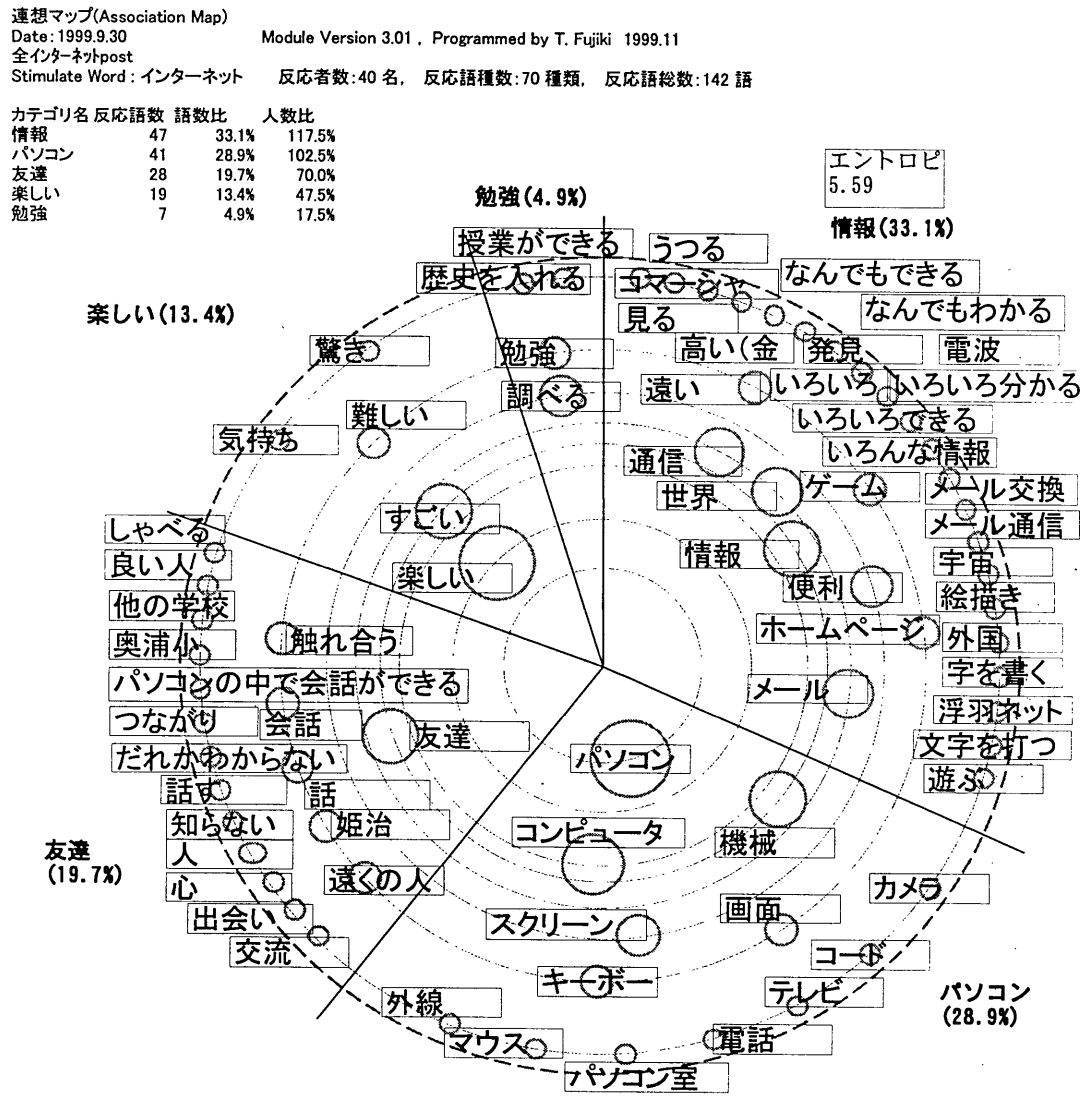



図２　奥浦・姫治、授業後〈インターネット〉連想カテゴリマップ

## Ⅶ. おわりに

今回の道徳遠隔授業を成立させ得たのは、１つは、教師のきめ細かい配慮であった。各授業者は、子どもたちのコンディションを整え、ゲームの工夫、マイクの使い方など、技術上の困難を工夫で補った。授業成立の２つ目は、150 通をこえるメール交換ならびに前夜の激しいともいえる打ち合わせであった。授業の打ち合わせそのものが、遠隔の技術を必要とした。こうした過程で互いの信頼を築いて授業はスムーズに進行する。３番目には、機器の調達、準備、協力依頼、打ち合わせに、長崎大学や奥浦、姫治のスタッフが精力的に動いただけでなく、各方面の協力をいただいことである。４番目には、地域を見つめる授業が、地域の人々の熱いまなざしにに支えられたことである。総じて、教師が教えるというよりも、こどもが学ぶためのケアが本授業の中核をなしていた。

機材、関係者数からすれば、本授業は日常の授業ではなかった。しかしそれは、まだ機

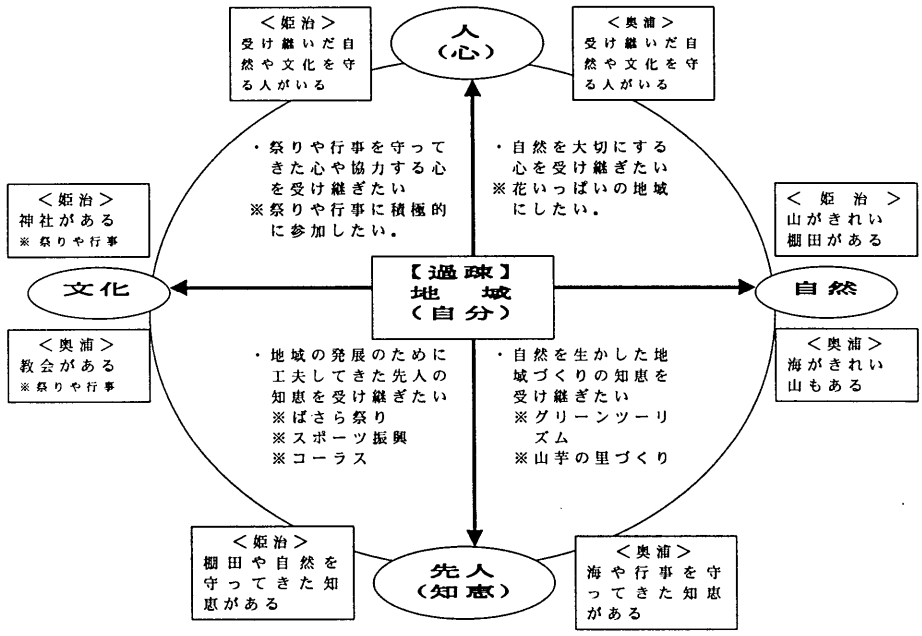
材などが日常化していない時点での構想であったためである。機器構成や授業構成としては、今後各学校で進められる情報機器整備につれていつでも可能となる形である。本授業で使った道徳遠隔の形式は、奥浦・姫治両校に止まらず、子どもたちの人間関係の固定化と考え方の広がりに壁を感じているところで日常化される必要がある。

註

1） 両校の月川雅朝、国武美代子校長をはじめとする教諭、職員の皆さん、NTT 西日本の福岡・長崎の皆さんに支援を頂いた。また浮羽郡教育委員会委員長に授業を参観頂くなど地域内外の多くの方々に関心をもって頂いたし、下学年の子どもたちも廊下から興味津々参加したそうな顔をしていたのが嬉しかった。技術科教育の里慎也、中原忍両君には機器ネットワーク構築で尽力してもらった。皆で手弁当でつくりあげた授業であった。感謝申しあげる。

2） 本授業の技術面については以下の論文に詳しい：藤木卓、里慎也、上薗恒太郎、山本和佳、増田祥子；２画面を利用した小学校道徳における遠隔授業の実践と評価、本紀要、本号

3） 上薗恒太郎、増田祥子、山本和佳、森永謙二；郷土を見つめる道徳遠隔授業、日本道徳教育方法研究第６号、2000 年 12 月

4） 連想調査に関して、刺激語を〈　〉で、反応語を「　」で、カテゴリを《　》で示す。

5） 板書計画を森永が作成したが、実際には使用しなかった。概念の繋がりの参考に、また総合司会による総括部分の理解のために以下に示す。